ベルママン」'86.10月号

うさんくさいイメージじゃなく明るい感じにしようと、まず料金表を作ったんです。

占いの主宰 **竹村亜希子さん**

1949年愛知県生まれ。マイコンを駆使し、占いをシステム化、新しい情報産業として企業に売り込んで成功した現代のシャーマン。今、力を入れているのはスペインのカタロニア地方で行われている「本とバラの日」を日本に普及させること。天秤座・O型。

名古屋市内にあるマンションの一室。「どうぞ」とドアを開けてくれた竹村さんは、黒っぽいドレスに長い髪という占い師風のイメージからはほど遠い人。

「会社の活動内容はすべね、易を中心に姓名判断、タロットなど十種類の占い。企業のパーティーなどのイベントコーナーや、ファッションビルにオープンの占いコーナーを置いて、スタッフ二十六人がローテーションを組んでやってます。私個人は企画とマネージメント、あと個人相談ですね」

とさらさら。人材派遣会社のオーナー風のお答え。

事務所を見回しても、机の上の筮竹と本棚の難しそうな易学関係の書籍の他は、神秘的な匂いは全くない部屋。ただ一つだけそれ風かなと思われるのは、ソファーの向うに置かれた大きな鏡ぐらいです。

「占いを職業にしようと決めたのは二十八歳のとき。結婚して、二人の子どもを育てて専業主婦してたんですけど、何か自分自身のイベントが欲しくなって…。

私にできることは何かって考えたとき、まず会社勤めはダメ、時間は午後だけ、それで資本のいらないものっていったら、私には占いしかないって思ったんです」

そのとき突然霊感が沸いて、っていうわけではなく、少女時代の不思議な仙人との出会いがそもそものきっかけ。

「中学二年のとき、突然フラリと変なおじいさんが家に来たんです。夢で見た家をやっと見つけたって言って…。家に泊めて、おもしろがって話を聞いてるうちに、二、三日のつもりがそのまま五年間もいついてしまったんです。熊本の人で、易学から手相、姓名学から命宮学までを極めた仙人だったんですね。世俗の名を捨てたというので、私はゼロちゃんって呼んでました」

このゼロちゃんに、家族の中でもいちばん興味を持ったのが亜希子さん。

「日常生活とは全然違った世界でしょ。もうおもしろくて、毎日べったりとくっついてました。わが家の奥の物置を改造した彼の部屋で、毎晩遅くまで、易経をはじめ彼が研究したものすべてを教わりました」

ゼロちゃんは五年後のある日、来たときと同じようにフラリといなくなってしまいました。

それからは、銀行に三年半勤めて二十二歳で結婚、趣味で時時占いする他はまったく普通の生活でした。

「仕事にするって決めて、まず千円で名刺を作り、料金表を持って会社回りをしたんです。そのとき三人目の子を妊娠してるのがわかったんですけど、途中でやめたくないので九か月になるまで外回りを続けました」

明るいイメージと、よく当たるという口コミでどんどん広がり、八年後の今は市内に常設コーナーを三か所持つまでに成長。

「占いって傾向と対策なんです。きちんとした根拠があるから、当たるのはあたりまえなんですけど、のめりこんで振り回されてはダメ。一つのものさし、武器として上手に利用していって欲しいですね。私は情報産業だと思ってます」

占いをビジネスにした行動派のシャーマン、家庭では三人(十三歳・九歳・七歳)の子のいいお母さん?

「うーん、いい子どもたちですよ」

とにっこり。

撮影=榎本輝夫/広野祐治/やまだしげる